



教育開発推進機構 NEWSLETEER

# 教育開発ニュース

VOL. 4  
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成 23 年 (2011) 7 月 30 日

## 目次

- 教育開発推進機構設立 3 年目 新機構長・センター長挨拶
  - 教育開発推進機構長 加藤季夫 (人間開発学部教授) ..... 2p
  - 教育開発センター長 加藤季夫 ..... 3p
  - 共通教育センター長 柴崎和夫 (人間開発学部教授) ..... 4p
  - 学修支援センター長 笹生衛 (神道文化学部教授) ..... 5p
- 教育開発シンポジウム 「建学の精神」の過去・現在・未来
  - 私立大学の個性輝く教育とは— ..... 6p
- 特集「自分史～社会のなかでの自己活用力養成プログラム～」
  - 「自分史」作成支援プログラムの始動にあたって 遠藤彰郎 (経済学部教授) ..... 11p
  - 利用学生からのコメント ..... 13p
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力！学生のまなざし！（４）—」
  - 教員の授業努力 山田佳弘 (人間開発学部准教授) ..... 15p
  - 受講学生からのコメント ..... 17p
- 教育開発推進機構彙報 (平成 23 年 2 月 1 日～ 6 月 30 日) ..... 19p
- そったくどうじ 啐啄同時—編集後記— ..... 20p



# 教育開発推進機構設立3年目 新機構長・センター長挨拶

## ■「教育開発ニュース4号の刊行」によせて

### ～ 國學院大學を知る1つの窓～



教育開発推進機構長  
加藤季夫  
(人間開発学部教授)

1980年代後半以降、日本の大学数は急増し、その結果として大学進学率は50%を超えるようになった。このいわゆる「ユニバーサル化」により、日本の大学、とりわけ私立大学には多くの歪もたらされ、そこに働く教職員はその対応に忙殺される状況になっている。この「ユニバーサル化」は多くの若者にとっては高等教育を受ける機会が増えたというメリットがあることは否定できないが、学修に対するモチベーションが低く、大学で何を学びたいのかを持ち合わせていなかったり、大学での学修に最低限必要とされる学力などが不足している学生も入学できるようになり、「知の基盤」としての大学の存在が脅かされるようになってきている現状を見ると、「ユニバーサル化」はデメリットのほうが大きいといえる。このような現状を解決する方法の一つとして、「大学入試センター試験」を「大学入学資格試験」に変え、一定の学力を持たない場合は大学の入学試験が受けられない制度が考えられる。それが導入できれば大学が抱える問題点の多くは解決できる筈であるが、よほどの指導力が文部科学省にない限りは無理なのかも知れない。

幸いにも、本学は上記のような問題はまだまだ大きくはないが、それでも今のうちにそれにしっかりと対応できる態勢を整えておくために、平成21年度に「教育開発推進機構」を設置した。「教育開発推進機構」は3つのセンターから構成されており、教育開発センターは教員の

教育能力を高めるFD活動や教員評価などの各種施策の実施、GP等の外部資金獲得の支援などを、共通教育センターは教養総合カリキュラムの開発・推進、資格課程教育や初年次・リメディアル教育の検討などを、学修支援センターは基礎学力の調査・分析、修学相談、悩みをもつ学生に対する支援などをそれぞれ主な業務としている。「学報」などの大学広報紙ではこれら3つのセンターにおけるさまざまな取り組みの状況や各学部における教育活動は概略しか知ることができない。そのため、教育力の更なる向上を目指すための本機構および各学部のさまざまな取り組みの詳細を発信していくための方法の一つとして、従来のFD委員会が発行していた「FDニューズレター」を発展させた「教育開発ニュース」を刊行することとなった。「教育開発ニュース」は現在までに3号が刊行されており、そこには本機構の取り組みだけでなく、本学の教育の理念や基本方針、各学部の生き残りをかけた種々の施策、教員一人ひとりの教育力向上の努力の履歴等が掲載されている。平成23年1月に刊行された最新号の3号にある「学修支援センター開設1年！——現状と課題」では、学生が大学生活を送る上でどのような問題を抱えているかが明らかにされており、初年時教育の重要性が再確認され、同号にある「授業をどうする～歩み始めた人間開発学部FDの現状と課題～」では、「学部ブラッシュアップ委員会」の実施や「学部独自の授業シラバス」の開発、「國學院大學人間開発学会」の設立など、他学部の参考になる先進的な取り組みが人間開発学部で行われていることがわかる。また、同号の「第III期SA座談会～学生視点で大学授業を考える～」では学生にとって望ましい授業や授業の受け取り方がよくわかる。さらに、シリーズ「大学授業最前線——教員の努力！学生のまなざし！（3）——」では学生参加型授業の構築に如何に教員の熱意と努力がなされてい

るかもわかり、受講学生からのコメントも興味深いものがある。

学内の教職員の方はこれを機会に、ぜひとも刊行されている「教育開発ニュース」を読んでいただき、どのような取り組みが本学でなされているかを知っていただくとともに、学外の方もぜひ本誌をご覧ください、忌憚らないご意見をいただければ幸いですと考えている次第です。

## ■記憶に残る授業の構築を

教育開発センター長  
加藤季夫

本年度、60万人を超す新入生がさまざまな想いを持って全国778大学で大学生活をスタートさせ、それぞれの大学の教育方針に基づいた授業を4年間受講し、所定の単位を取得して社会に出て行くことになるが、どれだけ授業が10年後、20年後の記憶の中に留まっているのだろうか。

本学は130年近くにわたり多くの卒業生を社会に送り出してきており、それぞれの分野において中心的な役割を果たしてきた、あるいはその分野をしっかりと支えてきた卒業生も多く、本学が伝統としてきた「教育力」が機能してきたと言えるが、近年の大学入試の多様化、入学してくる学生の価値観および大学に対する想いの多様化、さらには社会で求められる人材の多様化などを考えると、本学の「教育力」を今一度見つめなおす必要も生じてきている。すでに述べたように本学は学生を「しっかり勉学させる」ことを伝統としてきており、今後ともそれをより一層強化することが学生だけではなく大学にとっても極めて重要であり、そのためには教員は研究はもちろんのこと教育にもより一層の情熱を注ぐ必要があることを再確認する時期にきたといえる。先日、平成23年度FD講演会として山形大学の小田隆治先生に「学生参加型授業の開発と改善」のテーマで講演をいただいたが、その講演の中で「我々は、学生に学問の知識や知恵を身につけさせると同時に、学問を好きにさせることに心血を注がなければならないのではなかろうか」と話されていたことに講演会場にいた教職員一同が率直にう

なずいていたことが印象的であった。大学の教育の中心は何といても授業であり、教員には去年よりは今年、前期よりは後期を充実したものにするといった授業の絶え間ない改善の取り組みが求められているといっても過言ではない。この取り組みこそが10年後、20年後にも「記憶に残る」授業を構築し、それが結果的に母校への帰属意識・愛着心を生み出し、本学の社会的評価をさらに高めることにつながるといえる。しかしながら、教員一人ひとりが授業の改善に取り組むにはやはり一定の限界があり、大学全体あるいは学部・学科などの各段階において組織としても取り組む必要が生じてきており、その手助けをすることも教育開発センターの重要な役割であるといえる。

教育開発センターは、本学における教育力の向上を組織的に行う中心的な機関として設置され、1) 教員の教育能力伸長に資する講演会や各種研修の企画・実施、2) 教育力向上に関する各種情報の調査・分析・研究、3) 教育活動面における教員評価体制の整備、4) シラバスの改善・運用、5) テキストやメディア教材および教育支援システムの開発、6) スチューデント・アシスタント(SA)等による授業運営の支援、などの全学的な授業改善についての業務や、7) 各学部におけるFD活動等の支援、8) 教育改善のための公的資金等の申請やマネジメントの支援などの業務も教職員が一丸となって推進している。また、教育開発センターは以前のFD委員会の業務の一部も継承しており、従来のFD委員会の後継として21年度に設置された國學院大学FD推進委員会が企画・開催する「FD講演会」の支援なども行うとともに、教育方法や学修支援、カリキュラムさらには教育行政の動向などをテーマとして本学教職員が自由に意見を述べ合う「教育開発懇談会」を年間2または3回企画・開催している。

教育開発センターは、本学の現状を的確に把握し、他の大学の模範の1つとなりうる教育体制の構築することと、それがより一層の教育力の向上を生み出せるようにすることを目指している。本学の強みは「しっかりと学修する学生の比率が高いこと」と「教員と職員が一体となって物事にあたれること」にある。この長所を最大限に生かして、卒業生が誇れる大学として未来に歩いていくことができればと考えている。

## ■ 共通教育センター長に就任して



共通教育センター長  
柴崎和夫  
(人間開発学部教授)

共通教育センターは、教育開発推進機構に所属する3センターの一つです。その役割は、名前の通りに、「共通教育」に関連する事項についての様々な調査、提案、管理・運用、評価などを行うことです。では、共通教育とは何を示しているのでしょうか。

國學院大學の教育（学士）課程は、大きく「教養総合」と「専門」に分けることができます。「専門」部分は、各学部・学科が中心となりカリキュラムを策定しています。これは、学部・学科の核となる部分であり、人材育成の目的、学問分野の要請、國學院の伝統などを総合した個性的そして学部学科固有のカリキュラムとなっています。これに対し、教養総合は、そのかなりの部分が全学部で共通になっていることから、國學院大學では「共通教育」という呼び名を採用しているのです。國學院大學の共通教育の核となる部分は、「教養総合カリキュラム」に結実しています。「教養総合」は、本学の学士課程教育の基礎を成すものであり、かつ本学の教育の核を形成する部分と位置づけられています。建学の精神である「主体性を保持した寛容性と謙虚さ」を持つ人材を育成すること、の基礎部分を担うものなのです。

共通教育（教養総合）の第一歩は、大学の門をくぐった新生を、大学生として自立させることから始まると考えています。つまり、導入教育なり初年次教育を充実させることが、共通教育として重要なのです。本学の場合は、この部分が共通教育というより各学部の責任でなされているのが現状ですが、「國學院大學としての導入教育」という視点を提案していくのは、共通教育センターの役目と考えています。次に、専門に関わる基礎とは別に、社会でそして今後生きていく上で必要な幅広い教養の修得を後押しすること、が教養総合の大きな目的です。教養は専門の添え物に過ぎない、と見なす風潮もかつて

は存在していましたが、実はこの「教養」と言われている部分こそ、本学の建学の精神につながる人間性の涵養、そして現代の社会が大学生に求める「社会人力」「人間力」を身につけることに大に関わっているのです。

人間関係を築くコミュニケーション力や、グローバル化した社会で活躍するための外国語を扱う基礎能力を磨き、日本人としてのアイデンティティを知るために日本の文化・伝統を確認する、等々は教養総合カリキュラム（共通教育）の根本となっています。そして、これらの能力を磨かずに、専門の知識・技能を修得・応用する力は身につかない、と考えています。

大学の中の組織としては、その主な役割が、

- (1) ミニマムリクワイアメントの策定と運用に関すること
- (2) 教養総合カリキュラムの策定、運用及び評価に関すること
- (3) 初年次教育、リメディアル教育の調査、研究及び開発に関すること
- (4) 外国語教育の調査、研究及び開発に関すること
- (5) 日本語の教育の調査、研究及び開発に関すること
- (6) 副専攻の策定及び運用に関すること
- (7) コア・コンピテンシーの養成に関すること
- (8) その他共通教育に関すること

と定められています。個々の項目になっていますが、國學院大學の学生が基本として身につけて社会に出て行ける事柄、そしてそのような人材育成の基本を考える、ことが共通教育センターの役割であることは明白です。

しかし、その目的が共通教育センター単独で達成できる訳でないこともあきらかです。まさに、國學院全体の力を結集する必要があります。國學院大学らしい人材育成の基本をすべての教職員の方々と共に考え、その支持と協力を得て、共通教育センターの役割を果たしていきたいと考えています。皆様のご協力と手助けをお願いいたします。

## ■ 3年目の学修支援センター、 その役目と課題



### 学修支援センター長 菅生衛

(神道文化学部教授)

学修支援センターが正式に発足してから、3年目に入った。履修登録期間にあたる、今年4月の来談者は、504名にのぼり、昨年

の195名と単純に比較しても、各段に多い学生が利用するようになった。この一年で着実に認知度は高まったのではないかと考えている。今年は、認知度を更に高めると同時に、その機能充実を図ることを目標としたい。このニュースレターでは、その一端を紹介し、当センターの役割について理解を深めてもらいたいと思う。

### 【学修支援センターの役割】

#### 1. 個別学修相談

当センターの役割の大きな柱になるのが、この活動である。大学内には、学生の相談窓口として、学生相談室があり学生生活の全般にわたる相談に対応してもらっている。当センター相談室は、特に学修に関する相談に限り、学生相談室との住み分けを明確にしている。現在、月曜日から金曜日まで、専任の教員と職員が常駐する体制をとっており、学生の相談に対し個別に対応できるようにしている。相談内容は、大学での学修に関する全般ということになるが、中でも多いのは履修に関する相談である。大学のカリキュラムは、学生に多様な学修内容を提供し、様々な資格取得や副専攻の履修も可能となっている反面、履修についてはやや複雑になっている部分もある。一方、学修の躓きから卒業が危惧される学生もいる。そのような学生に対しても、卒業までの履修の道筋づくりを個別の相談の中で行っている。大学の履修手続きは、半年・一年の学生自らの学修計画を立てることであり、単に大学卒業だけでなく各種資格の取得も左右し、大げさに言えば学生の人生にも影響を与える作業である。今後も当センターでは、この履修相談を重要な活動と位置付けたいと考えている。当然、履修相談の他、講義・授業の内容がわからない、何を質問すべきかわからない、どのように勉強したら良いのか等々、広く学修に関する相談を受け付けているので、気軽に来談してほしい。

#### 2. 学修意欲の向上へ

当センターのもう一つの大きな役割には、初年次教育プログラムやリメディアル教育への取り組みもある。これは、基礎学力の向上を目指すもので、現在、各学部でもカリキュラムが作られ実施されている。当センターでも、これをサポートし、連携する方向を考えている。その一つとして、現在、行っているのが、各学部の基礎・必修科目の出席不良学生への対応である。各学部の学修支援センター委員の先生・教務課等の職員の方々と連携して、これらの学生に対する声掛けを行い、相談することで、どのようにすれば学修意欲を高められるのか、学生とともに考えている。今後も、学修面で問題を抱える学生には、来談を待つのではなく、積極的に声掛けを行っていききたい。

#### 3. ハンディキャップを持つ学生への支援

大学には、身体的に何らかのハンディキャップを抱える学生も在籍する。このような学生の学修面に関する支援も、当センターの重要な機能と考えている。これに関しては、今年から具体的な活動を開始した。学生が履修する講義・授業の担当教員への配慮願い、板書のノートテイク等、学生と面談の上、希望を聞きながら対応を始めたところである。学生のニーズを確認しながら、可能な範囲で当センターとしても対応を続けていきたい。

#### 4. 学生による学修支援

この「SA (Student Assistant) 制度」は、トライアル期間を含めて足かけで3年目に入る。大教室での講義には教員からの要望もあり、欠くことのできない存在になりつつあるように思われる。今後も、さらに教員との意思の疎通を深め、教育開発センターと共同して、アシスタント内容の充実を目指したい。

最後に、今後の課題について触れておきたい。現在の社会状況と連動して、学生の中にはメンタル面で問題を抱えている者もいる。学生のメンタル面には、学生相談室で対応してもらっているが、学修面での対応・支援は今後考えていかなければならない。また、メンタル面で問題を持つ学生に、教員・職員がどう接したらよいかという点も問題である。このような問題に対するスタッフの配置や講座による意識喚起など、今後、考えていきたい。あわせて、学生相談室との連携も強化していく必要があるだろう。

今年も、昨年につき試行錯誤の連続になるかもしれないが、教員・職員の方々の御協力をお願いしたい。

# 「建学の精神」の過去・現在・未来

## —私立大学の個性輝く教育とは—

平成23年2月18日、國學院大學学術メディアセンターの常磐松ホールで、「『建学の精神』の過去・現在・未来 —私立大学の個性輝く教育とは—」と題したシンポジウムを開催しました。安蘇谷正彦学長、阪本是丸研究開発推進機構長より開会の挨拶が述べられた後、諸大学が有する創設時の精神や、大学教育の拠って立つ理念を、具体的にどのように教育活動に活かしてゆくかという視点から、お招きした先生方より基調講演、およびそれぞれの大学の試みについての報告をいただき、またフロアも巻き込んだ活発な意見交換がなされました。ここでは、登壇された各先生方の講演・報告について、その主旨を紹介させていただきます。

日時：平成23年2月18日（金）13:00～18:00  
会場：國學院大學渋谷キャンパス  
学術メディアセンター（AMC）1階 常磐松ホール

### 【第一部】基調講演

「私立大学の個性と『建学の精神』—過去から未来へ—」  
講師 天野郁夫氏（東京大学名誉教授）

### 【第二部】シンポジウム

#### 「建学の精神と大学改革」

牧野富夫氏（日本大学常務理事・名誉教授）

「駒澤大学建学の理念考—学統は古い器に現今の構想を盛ることか—」

池田魯参氏（駒澤大学仏教学部教授）

「主体性を保持した寛容性と謙虚さ—國學院大學建学の精神の過去・現在・未来—」

赤井益久氏（國學院大學教育開発推進機構長・文学部教授）

「上智（Sophia）とキリスト教人間学—他者のために、他者とともに—」

大橋容一郎氏（上智大学文学部教授）

コメンテーター 天野郁夫氏

司会 中山郁氏（國學院大學教育開発推進機構准教授）

※所属等は開催当時のもの

### 基調講演

## 「私立大学の個性と『建学の精神』 —過去から未来へ—」



天野郁夫氏  
（東京大学名誉教授）

今日において建学の精神が問い直されるようになった大きな理由としては、ユニバーサル化の時代を迎えて、

大学が意欲的な拡大の時期を終え、質の向上と個性が問われる時代に入ったこと、また、高等教育政策の転換に伴い、自己点検・評価や外部評価等を通じて大学が自らのありようを反省的に再確認する必要に迫られたことが指摘できる。

日本の大学史を「大学の個性」という視点から振り返ると、①私学が成立・発展した初期には、それぞれの大学が明確な教育理念や目標を有しており、規模の小ささゆえの緊密な人間関係もあったが、明治末から大正初期にかけて、多くの私学が学校らしい形式を整え、また大規模な私学が林立するとその教育の中心がサラリーマン養成に偏るようになった、②昭和24年の新制大学発足後は、様々な高等教育機関が一括して新制大学に再編・統合され、また大学設置基準によって全ての高等教育機関が同じ基準・同じ形態の4年制大学に統一されていった、③特に私学は中等教育機関から送り出される大量の進学希望者の受け皿となったことから、マス化・マンモス化が急速に進展し、大学の人間形成機能が弱体化し、職業人養成へのシフトが進んだ、という経緯があり、高等教育がエリート段階からマス段階・ユニバーサル段階へ推移するとともに、その個性が失われていったと見る事ができる。

一方、こうした画一化の流れに対するリアクションとしては、①1986年に臨時教育審議会が打ち出した「個



性化構想」において、ユニバーサル化に対応するため、新自由主義的な考え方のもと「自由化・個性化・高度化」をキーワードとして、高等教育の多様化を図ることが目指されるようになった。② 1991年の大学審議会「大学教育の改善について」答申において改めて高等教育の多様化・個性化が説かれ、大学は学士課程教育の編成について大幅な自由を手に入れたが、この自由は個性化の追求には向かわず、一般教育課程の解体と、多様な名称の新学部の出現という傾向を推し進めることとなった。③ 2004年の中教審「大学の将来像」答申において文科省の高等教育政策は再度転換を迎え、「固定的な『種別化』ではなく、保有するいくつかの機能の間の比重の置き方の違いに基づいて、緩やかに機能別に分化していく」機能別分化論が出現した、という流れがある。こういう状況下において、今や建学の精神を改めて問い直す必要が感じられるようになっている。

大学が建学の精神を語るということは大学の個性を語ることであるが、建学の精神は創設者や理事者の理念であって、学生側から見れば、大学の個性は教育のありようによって求められる。その教育のありようのなかから新しい校風や学風を創造してゆくことが必要となっている。

大学進学者が50%を超え、学生人口の増加が見込めない時代において、改めてそれぞれの大学のカルチャー

と、教育機関としての理念が語られなければならない。そのためにも今後の私立大学は、それぞれの来歴や理念・目的を問い直し、建学の精神を再定義する作業を繰り返して行っていくことが必要となろう。

### 報告

## 「建学の精神と大学改革」

牧野富夫氏

(日本大学常務理事・名誉教授)

80年代の中教審答申や90年代の所謂「大学改革」において、大学の「自由化・個性化・高度化」が目指されてきたが、この20年はむしろ、大学の「不自由化・没個性化・程度劣化」が進んだ時代であった。大学は絶えず国の競争的資金獲得や認証評価に忙殺される不自由な状況にあり、大学の個性を語るはずの建学の精神や理念は、21世紀COEや現代GPなどの申請を行う際に建学の精神と結びつけて作文する機会は増えたにせよ、日常における教育・研究・校務には決して浸透しているとは言えない。しかも、今や大学は、本来大学に来るはずのない若者を大量に引き受けて、それらの学生に基礎教育を施して「大学生にする」ということをやっている「程



度劣化」の状況に陥っている。こうした状況を招いたのは、90年代以降に経済の論理・政治の論理に則って進められて来た所謂「大学改革」（大学改悪）である。

建学の理念・精神とは、大学にせよ企業にせよ、組織体というものがどこでも

掲げる「旗印」すなわち方針・指針として機能してゆくものである。たとえば日本大学の場合、建学の精神「日本精神」を立てて来たことに加え、新制大学になって以降、様々な検討を重ねた結果として、2007年、新たに「自主創造」という教育理念を正式に定めた。このように、理念とはその大学が歩んできた歴史を再検討、検証してゆくなから探し出してゆくべきものであり、それが過去・現在・未来の指針となるのである。また、現在日本大学では、四半世紀先の大学を考えるグランドデザインを作成しているが、これを具体化してゆく上でも、建学の精神や教育理念は有益であると考えられる。

しかし、理念・精神を具現化するためには、それ自体を磨き上げるばかりでなく、物質的な基礎が不可欠である。たとえば、最初に触れたような「大学生にする」ための基礎教育を本格的に行い、本来の大学教育に繋げてゆくためには少人数教育が必須となるが、そのためにはそれだけの予算、人員、施設を手配する必要がある。

我が国が私学向けの支援は先進諸国間でも極めて少なく、私学助成の経常費に占める割合は現状では1割程度に過ぎない。学校教育の受益者は国民全体であり、それ故、国がきちんと責任を負って支援してゆくべきである。また、こうした認識を踏まえた上で、教育・研究の論理に立つ本来の「大学改革」を、我々私立大学の教職員や学生が自分たちの問題として進めてゆくべきである。

## 報告

# 「駒澤大学建学の理念考 一学統は古い器に現今の構想を 盛ることか—」

池田魯参氏  
(駒澤大学仏教学部教授)

駒澤大学は、その寄附行為にある通り「仏教の教並びに曹洞宗立宗の精神に則り」教育を行うことを目的に掲げている。大正14年に、宗門の大学であった「曹洞宗大学」を「駒澤大学」に改称した当時、学長であった忽滑谷快天が表明したのが「行学一如」という建学の理念と「信誠敬愛」という実践項目であった。特に「行学一如」は、僧堂派（修行道場での修行、坐禅を中心とする僧侶たちのグループ）と、学林派（学問を中心とする僧侶たちのグループ）との対立を踏まえ、両者を統合する言葉としての歴史的背景を有しており、この伝統は今日まで宗門で引き継がれている。

しかし、近年駒澤大学では「行学一如」「信誠敬愛」について、仏教の言葉ではなく陽明学の言葉だとする指摘や、戦争中に軍部が若者を戦場に動員する際に利用した標語であるとして、建学の理念にふさわしくないとの批判が出されている。だが、「行学一如」と「信誠敬愛」は、ともに仏典や道元禅師の著書等に確かな典拠を有するのであって、それらの例を踏まえてこれらを捉え直すとき、①「行学一如」とは、実践に常に学問の裏付けがあることを意味し、仏教的人間教育の最終目標である日常実践活動と学問修養の人格的統合を表すものであり、②「信」「誠」「敬」「愛」の各語をそれぞれ現代語に読み替えれば、「己（の命の尊厳）を信じ、他（の命の尊厳）を信ずる」「己に誠実に、他に誠意をもって行う」「己を敬い他を敬う」「己を愛し他を愛する」という意味に展開することができるのである。

なお、平成22年度には「身心学道」という成句が建学の理念として新たに登場している。これは『正法眼蔵』に由来する、身と心で学ぶ仏道という意味の言葉であるが、これだけでは、実践面からしても、構想力の面でもやや弱い部分があり、やはり伝統の「行学一如」「信誠敬愛」の二句の意味を、今日の禅仏教のあるべき姿を表すものとして捉え直す必要があると考える。

最後に、現在の駒澤大学が建学の精神をどのように具現化しているかについて触れておきたい。①学内の建物に一仏両祖を奉安してある、②入学式、祝祷法要、三仏忌等の様々な行事、禅文化歴史博物館・禅研究所・仏教経済研究所・仏教文学研究所の各種催しや紀要の



刊行、竹友寮における日課の修行や行事が行われている、③一年次生全員が、全学共通科目「仏教と人間」を必修科目として一科目受講することになっている。私としては、こうした行事や試みを十分に活用してゆくことで、建学の理念を十分に浸透させ得るものと考えている。

## 報告

# 「主体性を保持した寛容性と謙虚さ —國學院大學建学の精神の過去・ 現在・未来—」

赤井益久氏

(國學院大學教育開発推進機構長・文学部教授)

明治15年に創立された皇典講究所は、明治維新後の近代化において極端な欧化主義を唱える風潮も見られた中、皇典の講究による国家の在りようの明確化、徳性の涵養、国民精神の覚醒に資すべくして構想された。その精神は初代総裁・有栖川宮熈仁親王の「告諭」に表明されている。さらに、その皇典講究所内に設立された国史・国文・国法を研究・講習する教育機関「國學院」が、大正9年に大学に昇格して「國學院大學」となった。山田頭義公の「國學院大學設立趣意書」には、ただに我が国の文物を研究対象とするのみならず、中国やヨーロッパの学術・倫理をも批判原理としつつ研究対象を闡明し、我が国のあるべき姿を講究する態度が打ち出されている。

終戦後、皇典講究所の解散に伴い存亡の危機に立たされた國學院大學は、建学の精神を考える第二の契機を迎え、その「学則」において初めて「神道精神」という言葉が明確に使われた。宗教研究としての神道研究と、これまで国学の研究対象とされてきたものを、広く教育・研究の対象として捉え直すとともに、そうした姿勢を改めて「神道精神」の下に意味づけて教育研究および人材育成の基本方針としたのである。

その後、他大学と同様マス化の時代を経過した國學院大學であったが、今や18歳人口減少の時代と高等教育政策の転換を迎えて、大学の自主性の確立と、その個性を歴史的かつ実地的に捉え直すことが求められるようになり、自己点検・評価活動、FD活動、情報公開の義務

化など、研究・教育に関する計画・方針を策定する必要性も増大した。ここに國學院大學は、建学の精神を考える第三の契機を迎えたと言えよう。その自己点検・評価活動において、國學院大學は「神道精神」を「主体性を保持した寛容性と謙虚さの精神」と捉え直し、生活規範・習俗・宗教祭祀・祭礼などの集合としての神道を、古来の典籍を通して攻究するとともに、関連諸学の応用や外国語を批判原理として対照しつつ、自分の国柄を闡明することを、建学の精神・神道精神として新たに位置づけた。これは皇典講究所・國學院の精神の継承であり、同時にその新たな解釈・意義付けでもある。

では、現在の國學院大學において、その精神はどのように具現化されているか。ひとつには、「伝統と創造」「個性と共生」「地域性と国際性」それぞれの調和を目指す「3つの慮(おも)い」と、その精神を支える「教育基盤整備」「研究基盤整備」「人材育成基盤整備」「国際交流基盤整備」「施設設備基盤整備」の5つの小委員会について、責任ある立場の理事が責任者として実施する「5つの基(もと)い」を掲げて推進している。また、建学の精神を実践するための組織的担保として平成19年に「研究開発推進機構」を設置、そのなかに「校史・学術資産研究センター」を設けた。さらに、平成21年には「教育開発推進機構」を設置し、研究開発推進機構とともに、建学の精神を研究と教育の両面から具体的に検証・実施してゆこうとしている。これらが、将来における國學院大學の建学の精神の第三のステージとなるであろう。



## 報告

# 「上智(Sophia)とキリスト教人間学 —他者のために、 他者ととともに—」

大橋容一郎氏

(上智大学文学部教授)

上智大学は、その名に戴くSophia(上智)の理念についてどう捉え、それを大学としての教育・研究のポリ

シーにどのように活かすか検討を重ねてきた。その際、カトリックの大学として神の啓示に基づく神学的見方を基本に置くとともに、その一方で、神学的視点を一方的に押しつけるようなかたちにならぬよう、人間の理性に基づく哲学的な視点を重視するという、ふたつの方向性に配慮した。両者の出会う場がすなわち Sophia（上智）であり、その具現化として、全学共通科目にキリスト教ヒューマニズムの理念を根本に置いた「キリスト教人間学」科目を設置したのである。

その取り組み内容としては、①「思索の基盤を深める」「人間として生きる」「キリスト教の精神に学ぶ」「よりよい世界をつくる」という4つの方向性を定めたこと、②これに従って平成21年度から全学共通科目の一部改訂を行い、パンフレットを作成して最初の数年間無料配布したこと、③1年次生全員に選択必修として「キリスト教人間学」を履修させ、その最初の時間に共通のパンフレットを用いて4つの方向性について説明を行っていること、④現在「キリスト教人間学」科目を選択必修で約80コマ開講していること、が挙げられる。

また、大半が選択方式である通常的全学共通科目についても、キリスト教人間学的な見方に沿って改訂を進め、「建学の理念」「思索の基盤」「人間と文化」「共生と世界」の4つに区分した。特に「建学の理念」は、学長や理事といった方々に話をさせていただくことも含めてかなりの人気科目となっている。

ここで、教育現場において「建学の理念」がどのような役割を持ちうるかを考えてみたい。ひとつには、牧野氏の指摘にあった通り、旗印・組織的な方向性という重要な意義がある。また、全学の学生・教職員・関係者に、自分たちの拠って立つ教育の方針について自覚を深めてもらう意義もある。その上で、さらにもうひとつの重要な側面が考えられる。

大学は放っておけばタコツボ化・専門化し、それぞれの学部・学科の内部ではそれぞれの論理しか通じな



いという状況に陥りがちである。しかもその論理は、経済的に厳しくなるにつれ没个性的・合理的なものとなってゆかざるを得ない。リベラル・アーツ的側面を持っている大学は、そういう流れに懐疑を呈すると

もに、本来あるべきコミュニケーションの在り方とは何かということ批判的に問いかける必要がある。

「建学の精神」もまた、そうした合理性の視点からすれば余剰に属する、悪く言えば非合理的で無駄な事柄である。しかし、その精神を大事にするということならば、たとえ合理性に反していても大事なものだということをはっきりと自覚し、理解を求め、積極的に実行してゆかねばならないものである。

たとえば、コミュニケーションの在り方ということについて、上智大学が理念として「愛と信頼」ということを掲げるのであれば、現場の教員としては「愛と信頼」ができるようなコミュニケーションをして、それを学生に教えることで、硬直化してゆく今日的なコミュニケーションの在り方に対して批判的な吟味を加えることが最も大事な仕事となる。

最も大切なことは、学生に生き方・話し方・人間関係の仕方ということをきちんとわかってもらうこと、自分の大学の建学の精神に則った仕方というものをわかってもらうということ、また、それを理解する教員や職員を増やしてゆくことであろう。

#### — 講演・報告を終えて —

登壇者の方々より講演・報告をいただいたのち、討議が行われました。天野先生より全体を通してのコメントをいただくとともに、パネリストの先生方の中で、お互いの大学の試みについて質疑応答が行われました。そのなかで、駒澤大学の建学の精神について質問が出た際に、来場されていた田中良昭駒澤大学総長が壇上に上がって解説して下さる楽しいハプニングもあり、会場は盛り上がりしました。

また、フロアからも「建学の精神について反発する教職員や学生からの理解を得るためにはどうすればいいか」「大学の形態や経営の在りかたが変わった場合、建学の精神は変更し得るものだろうか」等の質問が寄せられ、活発な意見交換がなされました。

# 特集「自分史」

## ～社会のなかでの自己活用力養成プログラム～

國學院大學が独自に開発した学修支援システム K-SMAPY。平成 14 年度の運用開始以来、授業の活性化、学生の学習効果向上に貢献してきました。この K-SMAPY から学生向けの「自分史」作成支援システムと教職員向けの「学生カルテ」システムにリンクし（これらのシステムを「K-Career」と呼ぶ）、更に進んだ学修支援とキャリア形成支援が行われています（平成 23 年 6 月現在、学生カルテは一部教職員利用可）。運用開始からまだ間もないこれらの機能ですが、使いこなすことによって、学生はより充実した日々が送れるようになり、教職員はその支援をすることができるようになります。学生支援 GP の事業推進責任者・遠藤彰郎教授（経済学部）に事業概要を説明していただき、また、「自分史」作成支援システムを活用している学生の声をご紹介します。

協力：教務課 仙北谷穂高課長・松本忠和主任

### 「自分史」作成支援プログラムの 始動にあたって



遠藤彰郎  
（経済学部教授）

#### 1. はじめに

平成 19 年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に選定された「学生みずから発信する『自分史』作成支援～社会の中での自己活用力養成プログラム～」の補助期間が終了し、教職員による本格的な実践活用段階に入った。正式の機関決定を経て「学生カルテ」に基づいた個別学生のキャリア形成支援に役立つ態勢が整ったため、改めてこの場を借りて概要をご案内したい。

本プログラムは、平成 19 年度後期から平成 22 年度にかけてこれまでの学修支援の成果を分析した結果に基づき新たに展開した取組だが、多くの学生が主体的に関わり、その成果も授業出席率の向上、退学者数の減少に

よって確認できたことは大変有意義であったと自負している。また、4 回の公開フォーラムを通して学内外に広くアピールできたことも大きな収穫であった。（平成 23 年 3 月発行「國學院大學 学生みずから発信する『自分史』作成支援～社会のなかでの自己活用力養成プログラム～報告書（平成 19 年度～平成 22 年度）」参照）

また、学生には本学が独自に開発した学修支援システム K-SMAPY（Web を活用したポータルサイト）が浸透し、シームレスに新たに自分史作成支援システムとして開発した K-Career にログインできる親和性と ISO27001 取得によって学生が安心して個人情報を入力できる堅牢な情報セキュリティシステムに対する信頼性により、同プログラムに対する学生の参加率はほぼ 100%となっている。今後はいかに専任教職員が個々の学生に対して適切な支援を行えるかが肝要となろう。

#### 2. 「自分史」プログラムを導入して

徳性の涵養を謳う建学の精神に則り、本学では全学的に修学相談、キャリア形成支援、保護者会における人的支援等を横断的、有機的に充実させてきた。平成 17 年度からは GPA 制度を導入し、GPA 1 未満の層に対しては教員による修学相談を実施し、中途退学に歯止めをかけるなど一定の成果を上げている。こうした従来の取組成果を踏まえて導入された本プログラムによって期待できる効果は次の 3 点である。

①コンピテンシー診断によって、学生に自分の強みと弱みを把握させ、徹底した自己理解の上にキャリア形成を行うことができる。

新入生に対して英語・数学・国語三教科の「入学時学力診断」を実施しているが、同時に本プログラムの基本データとなる「コンピテンシー診断」および「フォローアップガイダンス」を行っている。学生が継続して「自分史」を作成することにより自己の位置づけを知り、「気づき」と「振り返り」を通じて自己の成長に資することができる。

②教職員が学生ポートフォリオを面談等に活用することで学生の特性を理解し、その自立と成長を促す支援がで

対象学生数		2323
年度GPA	最大値	3.78
	最小値	0.00
	平均値	1.84
	中央値	1.89
出席率	最大値	98.4%
	最小値	0.0%
	平均値	70.3%
	中央値	75.5%
修得単位数	最大値	48
	最小値	0
	平均値	33.84
	中央値	38
	最頻値	46

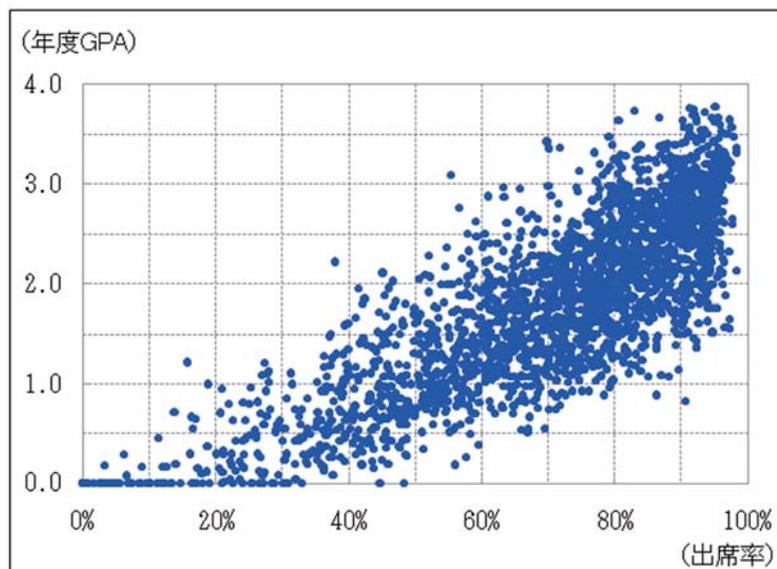


図1 平成18年度出席率とGPA

きるようになる。

学生が日常的にポートフォリオにアクセスすることで社会人としても必要となるPDCAサイクルが身につくとともに「学生カルテ」として教職員が個別指導に活用できるようになる。(次項参照)

③正課における導入教育と併せて実施することにより、約3割に上る不本意入学者や学修意欲の低い学生に大学生活の意義を提示できる。

教養総合科目にキャリアデザイン科目をおき、平成23年度は「インターンシップI(企業)」、「(公務員)」、「(教職)」、「インターンシップII」、「キャリアデザイン」、「キャリアデザイン(SPI非言語項目対策)」を展開している。また、複数の学部が導入教育としてクラス単位で実施している。

この取組全体を通じて複雑・多様化した社会で生きていくための「社会人基礎力」を育むことができる。また、中途退学や留年(卒延)を減らす上で有効である。

### 3. 「学生カルテ」の活用

K-SMAPYの「教員メニュー」を開くと「学生カルテ」の項目がある。機関決定を経てアクセス権が付与されると、学生カルテに関する情報を閲覧することができる。この運用には教務部、学生部、就職部の教職員すべてが関わり、ポートフォリオを学生カルテとして活用し、多様化する学生の「個」と「質」に対して直接働きかける学生支援を実現して行くことができる。特に、ボリュームゾーンであるGPA1.0～2.0、出席率40～80%の中

位層【図1】に対しては従来の人的支援では限界があったことも否めない。この層には心身ともに健康であるにもかかわらず、無為に日々を過ごしてしまう学生が一定数存在する。本プログラムは、学生自身の自覚を促し、主体的に生きる力を養う上できわめて有効だが、意欲の低い学生や対人関係性に不安をもつ学生はみずからの力でそれを乗り越えるのは難しい。ここは教職員による人的支援が欠かせない分野である。本プログラムではあらかじめ彼らを抽出することができるので、有効な対処ができると期待される。

「学生カルテ」をクリックすると検索ページが開かれ、条件設定に応じて個々の学生カルテが検索できる。「学生検索」は「学籍番号」、「氏名(漢字)」、「氏名(カナ)」、「チェック・ボタンで検索を絞る「担当グループ」と「状態」からなり、個々の「学生カルテ」をクリックすると、「学生基本情報」、「学修情報」、「進路・就職情報」、「学生生活情報」、「対応履歴」が分かる。教員にとってもっとも関心があるのは「学修情報」であろう【図2】。このページには学生の「専攻・副専攻・教職・資格・ゼミ」に加え、「当該年度時間割、出席情報」、「取得単位数・GPA・出席率」、「修学相談呼出履歴」、「入学時学力診断」が表示されている。なお、個人向け通知履歴とリンクされているが、個人情報は見られない仕組みになっている。

### 4. おわりに

入試制度の多様化もあり、一様に平均に合わせた教育は効果が薄い、と感じている教員は多い。しかしながら、



図2 学修情報

なかなか有効な手立ては講じられない——本プログラムは教職一体となって学生個人々々に対応した支援を行う上できわめて有効なツールである。今後もフィードバックを重ねブラッシュアップを続ければ比類のないプログラムとなろう。各位のご理解、ご協力を切に願う次第である。

### 「自分史」を使ってみて

Aさん (文学部1年・女)

私が、K-SMAPYの「自分史」を使おうと思ったのは、入学後に行われたキャリアサポートガイダンスに出席したことがきっかけです。「自分史」というシステムには、大学生活を充実させるために必要とされているPDCA、つまりPLAN(目標をたてる)、DO(努力)、CHECK(ふりかえり)、ACTION(改善)を意識した生活ができるように工夫されています。目標を設定する際には、何月何日と具体的な日にちを入れられますし、日記をつけることもできます。私は改めて、達成期限を決めて、目標を立てることは大切だと思いました。というのも、去年

の夏、日誌の書き方を教えてくださった先生も同じことをおっしゃっていたからです。期限付きで目標を決め、勉強以外にも生活態度をふりかえる欄があったことは、「自分史」と同じ構成でした。

私はいま、高三のときにつくった日誌のなかの項目とK-SMAPYの「自分史」の項目とを合わせた、新しい日誌を使っています。細かい点でふりかえりができる日誌の長所と、目標達成への具体的な方法が書ける「自分史」の利点を活かすことで、一歩すすんだ計画づくりができるようになったと感じています。パソコンで手軽に確認できるところもいいと思います。私は目標を書く欄しか使っていないのですが、定期的に確認して工夫して使っていきたいと思います。

### 自分史

Bさん (経済学部2年・女)

私が自分史を活用しようと思ったのは実はたまたまでした。最初はあまり知らなくて、名前も聞いたことあるな~程度でした。でもK-SMAPYを暇つぶしに見ているときにふと見つけたものが、この自分史でした。私が思う自分史をうまく活用するコツは真面目に真剣に書かないことだと思います。こんなこと書く意味がわからないかもしれませんが、真面目に書かずに自分の書きたいことだけを、書きたいときに書くのです。毎日書く必要はないし、書く内容はなんでもいいのです。学校のことはもちろんのこと自分の目標でもいいし、免許のことやバイトのことなど國學院に関係ないことも書くことができます。たぶん、皆さんが思っているよりも自分史は単純で簡単で使いやすいものだと思います。あとは、この先生は声が小さいから席は前のほうに座ったほうがいいのか、自分にあっている先生だった、など自分が三年生、四年生になったときに忘れないように残す手紙のようなものでもあると思います。気楽に書きたいことだけ書けばいいのが一番の自分史の長所だと私はおもいます。

また大学で出たレポートなどの期限は大学のスケジュールとして自動的にカレンダーに記載してくれるので忘れる心配はありません。また、マイスケジュールはこの日までこの科目の復習をやっておこう!とか、今日から一週間でこのレポートを仕上げよう!など期間ごとにも、また決まった日にちごとにも分けて設定でき

ます。期間も大きくとれるので来年までにこの資格をとりたい、などの曖昧な目標も書くことができます。そのほかにも、重要度でもわけられます。例えば、「新しいバイト今月までに決めたいな～」だったら重要度は小、免許だったら中、課題だったら大！など自分なりにアレンジできます。

自分史は暇なときなど、パソコンで見ると、カレンダー別や重要別にやらなければいけないことや、やりたいことが見えるので、自分が何から手をつけていけばいいのかがわかりやすくなっていて整理されます。

やったことがない人も、今初めて知った人も、手軽にすぐにはじめられると思うので、ぜひはじめてみてください。

私にとっての自分史は最初は軽くはじめたのに、いまとなっては自分の生活になくてはならないものになっています。皆さんも自分史を利用したら名前の通り、自分の色に染めて本当の自分史を作ってってください。

**世界にただひとつの自分史**  
ニシムラヒロツグさん（法学部法律専門職専攻3年）

自分史には次のような利点があります。その一つが、自分の成績状況が把握でき、それを踏まえた目標設定と振り返りが行えるという点です。自分史には取得単位数、GPA、出席率で学年全体と学科全体の順位（平均）が表示されます。みんなはどのくらい単位を取得しているのか。足りないのか、十分か。みんなはどのくらいGPAがあるのか。自分はまだもっと勉強しなければならないのか。みんなはどのくらい自主休講しているのか。自分自身とその他の学生との位置関係がこれで理解できるのです。私は既に卒業要件の単位は充足し、GPAは限りなく4に近く、出席率は限りなく100%に近い数値となっています。これは一重に、私の知的好奇心を刺激し続ける魅力あふれる講義を提供して下さる先生方のおかげなのです。私にとっての講義受講とは、ちょうど毎日好きなアーティストのライブを聴きに行くことができるようなものなのです。予習と復習を欠かさないことで積極的な受講が可能となり、一体感を感じることができます。少なくとも法学部の先生方は皆、非常に話が面白く、そして心をとらえる内容であると私は感じています。

先生方が行う講義時の説明において、私は幾度となく心を動かされてきました。そこには現在までの法制度に達するまでの判例や学説、先人の数多の苦労や議論があり、虐げられた人々の一番の味方であり続けたいと考える私の心の琴線に触れるものが少なくないためなのです。

自分の成績状況を把握すると、次回の目標設定と振り返りを行います。このとき高望みせず実現可能な範囲に留めておく方が、達成感を味わうことができます。私ならば実現可能な範囲で単位数はフル単、GPAは4、完全出席を目標とします。振り返りの際は数字をただ眺めるのではなく、ノートや講義録音等から自分自身の平常点、心構え、そして試験においてどのように臨めたか否かという点を重点的に振り返ります。私は試験終了後帰宅すると直ちにその内容をメモ書きし休みに復習しています。答案を閲覧させて下さる先生方もいらっしゃるので相談させていただくこともあります。

自分史の第二の利点は、学生生活上の目標を掲げることができ、かつ振り返ることができる点です。私の毎年の目標は首席の成績を維持し、毎朝味噌汁（赤だし）をとることです。さらに自分史が大好きな人ならば、自分史を毎日活用することもできるのです。学生生活における自分なりの行動計画を立案し、実行後振り返りを重ねていけば、それは大きな自分の強みになると思います。國學院大学の「自分史」作成機能は、目標を持って夢の実現に努力する学生を支えて下さる重要な、そして必要不可欠なツールなのです。私はこれからも支えて下さる両親、諸先生方、そして周囲の人間関係に感謝しながら自分にしか創ることのできない世界にただ一つの「自分史」を一つ一つ積み重ねていきたいと思っています。



注記：本記事における学生の氏名掲載・表記は本人の希望によるものです

# 大学授業最前線

—教員の努力！学生のまなざし！（4）—



「大学授業最前線」は、國學院大學で素晴らしい授業を行っている先生方に、その努力と工夫について語っていただくコーナーです。シリーズ第4回目は、たまプラーザキャンパスで行われている人間開発学部の山田佳弘先生の授業について、先生にインタビュー形式で語っていただくとともに、受講している学生からのコメントもあわせて掲載させていただきます。

## 教員の授業努力



「運動方法基礎実習  
武道系3（弓道）」

山田佳弘  
（人間開発学部准教授）

——「運動方法基礎実習武道系3(弓道)」はどのような科目ですか？

見た目は簡単そうに見える弓道ですが、実際にやってみると予想以上に難しいと体験された方のほぼ全員が口を揃えます。

弓具が非常にシンプルで弓を撓ませてその復元力を利用して28m離れた36cm的的に矢を飛ばすだけです。初心者は意外に矢が飛びません。手で投げた方が遠くへ飛ぶのではないかと思うほどです。そのため受講生のほとんどが、『こんなはずはない!』『なぜ?』『どうして?』とショックを受けて頭を混乱させています。健康体育学科の学生は高校までに経験してきた多くの種目で人並み以上のパフォーマンスを表現できてきた人達です。その学生達が上手く操作ができず真剣に悔しがる姿は可哀想なぐらいです。

弓道は、「mmの単位」での精度が求められます。他の武道種目と違い、対人形式を取りませんので、結果の原因はすべて自分自身に帰結します。好結果が得られないのは自身の動作に何がしかの間違いがあるためです。

その原因を冷静に分析し、その対処方法を見つけ出さなければ的中を得る事はできません。偶然的中する事は稀にありますが、偶然は連続では起こりません。

その昔、弓矢は「人を殺す」ために存在していましたが、現代の弓道は「人を活かす」ために存在すると言われています。「人を活かす」とは、弓矢の操作技術を通して人間として持たなければならない努力や探究力、忍耐力、決断力などを身につけ向上させる事と考えています。この授業ではこれらの事を学生が自らに問いかけてもらおうと思っています。

### ——授業はどのように進められていますか？

何といっても飛び道具を使用しますので、安全を第一に考えて進めています。危険な道具ではありますが、操作する側の心掛け次第で人の役にも立ちますし、傷つける道具にもなる事を学生に伝え、教員と受講生、または学生同士で他者を思いやる気持ちを持って受講させるように指導しています。

実際の授業では、弓道は幾つかの条件が揃う引き方をすると的中が出てくると言っています。また連続して的中させるためには集中力がポイントとなるとも言います。弓道には古来より日本弓の性能を引き出す射法が確立されています。その引き方を自身の体で表現していく

際に決められた条件を揃えていくことに拘れと云って  
ます。

射法の意義を教え、弓具の特徴と取り扱い方法、規  
されている射法を指導し、ちょっとしたコツを解説し  
ら実践です。4週目にもなる的中させる学生が出て  
ます。そうすると、まだ的中させられない学生は焦り  
め、結果が出せた学生との違いを自ら模索し始めます  
よく中(あた)る学生が女子学生となると男子学生は  
更焦って研究し始めます。時折、よく的中する複数の  
生をモデルとして弓を引かせて共通点を見つけて発表  
させたり、よく中る学生にどんなことに注意して弓を  
いているかも発言させて、その他の学生に参考にさせ  
います。

この授業は自らが情報を得て自らが考えて取り組む  
タイルの授業なので、研究熱心に取り組めばその成果  
的中として結果として反映され易いのが特徴です。学  
達も授業を重ねるごとに自身の動作と的中に手ごたえ  
感じて積極的に取り組み始めます。そうすると学生同  
で情報交換も行われ、授業は学生主体で勝手に進んで  
きます。

### ——授業を進める上で気をつけていることや工夫を ていることはありますか？



弓道はパフォーマンスと弓  
フォームとの相関関係が非常  
高い種目です。よって決めら  
れた射法を正しく覚える必要が  
ります。しかしながら1回90分  
14週間でそれなりのフォーム  
学習させるには時間が足りま  
ん。そのため授業では、効率  
に弓射フォームを理解させる  
めに補助教材を多用しています  
また、フォームの良し悪しを  
別する見抜く力も必要となる  
で、ペアを組ませて学生同士  
指摘し合えるようにしています  
さらに、自身の弓射フォーム  
分析できるようにビデオカメ  
によるビジュアルフィードバ  
クシステムの装置を活用して

生が自主学習できる環境を整えています。このシステムを活用することで、私からの技術指導の内容を自身のフォームを見ながら出来ているかの確認ができ、課題の整理ができるようになっています。

——授業を通して学生に期待することや学んでほしいことは何ですか？

多くの企業で生産性の向上を図るために『PDCA サイクル』というシステムを導入しています。4つのアルファベットはそれぞれ英単語の頭文字を示しています。すなわち、「P:Plan(計画)」、「D:Do(実行)」、「C:Check(評価)」、「A:Action(改善)」を指し、工場などにおける生産管理や品質管理などの管理業務を計画通りにスムーズに進めるための管理サイクルシステムの一つだそうです。1サイクルの最後の「Action」を次のサイクルの「Plan」に繋げていくことで継続的な業務改善につながると考えられています。

この「PDCA サイクル」の仕組みは、弓道の授業にも当てはめることができます。『(P):こうすれば矢が的中

するはずだという“計画(仮説)”』→『(D):実際に計画通りに弓を引いてみる“実行”』→『(C):放った矢が的に的中したか、どこに外れたかの“評価”』→『(A):的に外せば、その原因を再検討し、次の仮説を立てる“改善”』。

この繰り返しにより、偶然ではなく必然的に的中させるフォームを確立させるのが弓道です。そしてこれは他の勉強も人生も同じだと思います。常に実行と反省の繰り返しです。この授業を通して、諦めないで真実を追求する心構えを養ってもらいたいといつも考えています。



## 受講学生からのコメント

私は、今までやったことがない弓道にとっても興味があり、受講しました。

弓道はとても静かに授業を行います。心を落ち着かせるため、また、集中力を高めるために、先生以外は必要がない限りしゃべりません。

最近では実射に取り組み始め、矢を飛ばしています。しかし、自分が思っていたのとは全く違い、全然的に当たりません。弓を持つ左手、矢を引く右手、姿勢など弓道では意識することが多いです。射るときに左右上下5ミリでもズレると、的に届くときには大きくズレて当たりません。

弓道をやり始めて早速挫折していますが、弓道の良いところは、矢を飛ばす瞬間の爽快感です。集中して弓を一杯に引き、もうこれ以上引けないところで放つ。全てのことから解き放たれるようなこの感じは、是非体験してほしいと思います。

今度は、的に当たったときの喜びを感じられるように、毎回の授業を大切に受けたいと思います。

①戸村栄介さん  
(人間開発学部健康体育学科1年)



山田先生の運動方法基礎実習武道系の弓道を受講してわたしは純粋にこの授業が毎回楽しみです。

ほかの講義とは、また違った学びがたくさんあると思っています。授業が楽しいと言える理由は、単に的に当たるから楽しく、当たらないからつまらないということではなく、弓の弾く力加減や、向きや高さへの「こだわり」が、弓矢に大きく影響するところだと思います。

まずは、弓道の道具について、実際に弓の断面の一部や、同じ矢を使うアーチェリーとの違いを学びました。

そして、この授業では「安全に行う」ということも重視していて、弓道以外のスポーツにおいても共通して言えることで、自分が教えるという立場になったときにスポーツを行う以前に怪我や事故が起こらないように指導することの大切さを学びました。そうすることで、授業もスムーズに行うことができ、矢を打つ回数も増えてたくさん練習することができています。

次に山田先生の見本を見たり、レポートでポイントをおさえたりして、「正しいフォーム」を覚えるということをしました。

初めは、自分で正しいと思っているフォームをしていても、他の人や先生にみてもらうと、腕が下がっていたり、平行になっていなかったりして、自分が自分の体の動きに対する意識というものが低いことに気づかれます。

そして、わたしのような、弓道を未経験の初心者でも、正しいフォームで打つことができたときには、矢は的に当たるということが、弓道の魅力ではないかとわたしは思います。

そして、打つ時には、次の弓のことや、ほかのことは考えず、今の狙いだけに集中するというのも、他の授業では味わえない感覚だと思います。



②伊東円香さん

(人間開発学部健康体育学科 2年)



# 教育開発推進機構彙報

(平成23年2月1日～6月30日)

※職名等は当時のもの

## 会議

### ○運営委員会

[平成22年度] 第4回：3月23日

[平成23年度] 第1回：6月1日

### ○國學院大學FD推進委員会

[平成22年度] 第6回：3月9日

[平成23年度] 第1回：5月11日 第2回：6月22日

### ○教育開発センター委員会

[平成22年度] 第8回：3月9日

[平成23年度] 第1回：4月27日 第2回：5月25日

第3回：6月22日

### ○共通教育センター委員会

[平成22年度] 第9回：3月9日

[平成23年度] 第1回：4月20日 第2回：5月25日

第3回：6月22日

### ○学修支援センター委員会

[平成22年度] 第9回：2月23日

[平成23年度] 第1回：4月27日 第2回：5月25日

第3回：6月22日

### ○合同連絡会

[平成23年度] 4月14日

## 行事

### ○講演会・シンポジウム

[平成22年度]

**2月18日** 國學院大學教育開発推進機構 教育開発シンポジウム「『建学の精神』の過去・現在・未来—私立大学の個性輝く教育とは—」

第一部 基調講演「私立大学の個性と『建学の精神』～過去から未来へ～」

講師：天野郁夫（東京大学名誉教授）

第二部 シンポジウム「『建学の精神』の過去・現在・未来—私立大学の個性輝く教育とは—」

報告者・パネリスト

「建学の精神と大学改革」 牧野富夫（日本大学常務理事・名誉教授）

「駒澤大学建学の理念考—学統は古い器に現今の構想を盛ることか—」 池田魯参（駒澤大学仏教学部教授）

「主体性を保持した寛容性と謙虚さ—國學院大學建学の精神の過去・現在・未来—」 赤井益久（國學院大學教育開発推進機構長・文学部教授）

「上智（Sophia）とキリスト教人間学—他者のために、他者とともに—」 大橋容一郎（上智大学文学部教授）

コメンテーター：天野郁夫

司会：中山郁（國學院大學教育開発推進機構准教授）

**2月26日** 学生支援GP公開フォーラム（主催：学生支援GPプロジェクト 後援：学修支援センター）

[平成23年度]

**6月29日** FD講演会「教養教育における学生参加型授業の開発と改善」

講師：小田隆治（山形大学地域教育文化学部教授・教育開発連携支援センターFD支援部門長）

### ○研修会・打ち合わせ会等

[平成22年度]

**2月8日** SA（スチューデント・アシスタント）第Ⅲ期トライアル報告会

[平成23年度]

**5月14日** SA（スチューデント・アシスタント）研修会

**6月18日** SA（スチューデント・アシスタント）中間報告会

## FD活動、教育支援

[平成22年度]

**2月9日** FDワークショップ開催

講師：井上史子（立命館大学教育開発推進機構講師）

[平成23年度]

**4月1日** 新任教員研修

## 出張等

[平成22年度]

**3月5・6日** 赤井機構長・中山准教授、大学コンソーシアム京都第16回FDフォーラムに参加（京都外国語大学）

**3月7日** 赤井機構長・中山准教授、立命館大学教育開発推進機構でヒアリング（立命館大学朱雀キャンパス）

[平成23年度]

**5月28日** 小濱助教、大学行政管理学会月例会に参加（國學院大學）

**6月15日** 加藤機構長・中山准教授、全国私立大学FD連携フォーラム関東圏懇談会に参加（法政大学市ヶ谷キャンパス）

## 刊行物

[平成22年度]

**1月12日** 教育開発推進機構NEWSLETER『教育開発ニュース』第3号

**2月** 『FDハンドブック改訂版』

**3月10日** 『教育開発推進機構紀要』第2号発行

**3月** 『平成21年度授業評価アンケート分析報告書』



平成 23 年度 FD 講演会に小田隆治山形大学教授をお招きして（6 月 29 日）

前列右より、笹生衛学修支援センター長、小田隆治教授、加藤季夫機構長・教育開発センター長、柴崎和夫共通教育センター長、後列右より、川島富貴子書記、中條豊主幹、鈴木崇義助教、中山郁准教授、小濱歩助教、佐川繭子准教授、新井大祐助教、内藤紗綾香書記

■ SA（スチューデント・アシスタント）募集（予告）

教育開発推進機構では、大人数教室での教育効果向上を目指して、SA（スチューデント・アシスタント）制度を実施しており、各セメスター開始時に SA を募集しています。

[対象] 2 年生～4 年生（留年者・卒業延期者は不可）

[内容]

- (1) 教材・資料の準備（印刷・運搬のみ）および配布
- (2) 出席カード、コメント・ペーパー等の配布・回収・整理
- (3) 授業評価アンケートの配布・回収
- (4) AV 機器等の運搬・設定準備及び操作
- (5) 小テスト・レポートの配布・回収

※スチューデント・アシスタントは成績評価に関わる業務は行いません。

採用期間・給与等については募集時に学内に掲示します。

そ っ た く ど う じ

— 編集後記 —

第 4 号刊行の運びとなりました。今回は、三年目を迎えて新体制となった機構の新機構長・新センター長の挨拶、2 月に行われた教育開発シンポジウムの報告、「自分史」作成支援システム関連の記事、人間開発学部山田佳弘准教授の実技系の授業紹介(シリーズ「大学授業最前線」)、と多彩な内容となりました。「自分史」はまだ学生への浸透が足りない感があり、是非活用して欲しいと思います。また、こうしてみると、國學院大學というのはなかなか個性的な大学であるな、伝統を保持しつつ進取の気性に富む大学であるな、と他所から来た着任一年目の人間は認識を新たにしました。

特集「自分史」は、教務課のご協力がなければ成り立たなかった記事です。この場をお借りして感謝申し上げます。(佐川)

教育開発推進機構 NEWSLETTR『教育開発ニュース』第 4 号 平成 23 年 7 月 30 日発行

発行人 加藤季夫 編集人 佐川繭子・小濱歩・伊藤英之

発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒 150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28